

まちの達人から

学ぶ

まちをよくするための活動ってどんなコト？  
まちをよく見てみると、  
「私たちの住んでいるまち」のために、  
さまざまな人が活躍しています。  
東区を愛する魅力的な「まちの達人」を紹介します。

※ご年齢は取材当時のものです。



子どもたちの  
安全と成長を見守る

右から

- 山本 長邦さん 82歳
- 筒井 育子さん 80歳
- 榊原 孝男さん 81歳

毎朝、小学生の登校時に合わせ、車道駅前前で分団登校する子どもたちを、交差点まで付き添い、安全を見守ります。筒井さんが11年ほど前から行っていたところに、葵学区で子ども見守り活動を始めるのに合わせ、山本さんや榊原さんが加わりました。皆さん、子どもや孫を育て、見守り続けてきたまなざしを、今では地域の子もたちに注いでいます。桜通沿いで交通量も多く、自転車も多いこの頃。自転車は速度が速いので、子どもたちがふと飛び出すと事故になりかねません。そうならないよう事故防止に気遣います。また、集合時間に遅れてくる1年生がいれば、少し待ってもらおうよう上級生に



話しかけることも。子どもたちの成長が楽しみで、夏休みの間でも大きくなったと感じるそうです。「地域活動は一人で作るのは大変。特に男性は退職してから、家にこもりがちになる。だけど2、3人いれば、安心して入っていける。このメンバーがいたから続けられた」と皆さん語ります。見守り活動は散歩のついでにできるし、健康づくりに最も適。参加は自由で、できる時間に、無理なく行えます。この見守り活動が広がり、次の世代へつなげていくことを願っています。



まちを愛する仲間と  
防火・防災を祈りながら

森島 育さん 60歳

筒井消防団では、毎月第3日曜日にポンプや発電機などの機器点検や訓練を行います。また、地域で出火の情報が入ると、出動可能な隊員は現場へ出向き、交通規制など消防隊の活動支援を行います。その消防団長が森島さん。副団長だった父を引き継ぎ、30余年活動しています。仕事と両立しながらの活動は大変だが割り切れていて、むしろ仕事中でも、どこかでサイレンが聞こえると気になってしまうほど。



消防団の活動には隊員の結束が不可欠ですが、筒井消防団では、研修旅行や地元の運動会で発表する「防災YES・NOクイズ」の作成などを通じて隊員の親睦を図ってきました。コロナ禍でこれらが中止となる中でも、LINEなどで情報交換

をしているそうです。結束力や日ごろの訓練の成果を披露する可搬式ポンプの操法発表会では多数受賞歴があり、そのたびに隊員の絆は固くなったそうです。「この結束力の強さは、天王祭など地元の祭りの影響もあると思う」と森島さん。長く住み続けているまちや伝統を愛し、守りたい人々の思いが一つになってい。その思いを共有する仲間を募集しています。また、最近、災害が多いが、大切なのはまず「自分を守ること」。自助があつてこそ、共助があると呼びかけます。



人と自然に  
お話ができるのが  
いちばん良かったこと

和泉 節子さん 77歳

旭丘学区の和泉さんは、保健環境委員を務めて6年目(委員長として3年目)。毎週の資源ごみの日に、水色のベストを着てステーション(地域の集積場所)に立ちます。前日の夜に出される方もいるので、まずそれを分別。整頓された状態を作っておくと、以降は順調に分別されて出されるのだそうです。以前は、委員の仲間たちが集まって活動をしていましたが、コロナ対策のため時間で交代するようになりました。和泉さんの担当は朝の6時から7時ごろまで。前日の夜は「明日は早起き」と、ちよびりドキドキするのだとか。「あそこに立っていると『苦労様』と声をかけられたり、お子さんが出しに来ることもあつて『ありがとね』と声をかけたり。